

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	パレスチナ自治区ヘブロン市における青少年の社会心理状況の改善のための学校教育および市民社会の能力向上
(2) 事業内容	<p>&lt;各段階実施内容&gt;</p> <p>イ) ワークショップ： 中間報告までに、3月から毎月9回1タームのワークショップを完了し、現在6月のワークショップを実施中である。ウォームアップ、インターアクション、コンセントレーション、クロージングの4種のカテゴリ分けをしたドラマ・メソッドのワークショップに加え、各月に1度子供の権利に関する講義を導入している。そのようなテーマの講義に参加するのが初めてという参加者も多く、子どもに対するケアの必要性の認識する重要な機会となった。ヘブロン市内H2エリアも含め、ヘブロン県内広域の教育関係者・ソーシャルワーカーを参加対象とし、5月までで44名が参加した。</p> <p>ロ) 実践機会の提供： 6月2日に3月と4月のワークショップ参加者を対象として、子供たちに向けて学んだ手法を実践する機会を設けた。ワークショップ参加後、各人の職場でのパフォーマンスの振り返りに加え、ドラマ・メソッドを実際に運用するに当たっての追加的な助言が与えられた。またこの機会に、ワークショップ終了後に日常の職務で子供たちに接する際、このプログラムで学んだことを活かせたかどうか、さらにワークショップを通じてであった講師や他の参加者と継続して相談、連携をおこなっているかについても参加者からフィードバックを得た。</p> <p>ハ) 情報の蓄積： 中間報告までに、カウンターパートのイエス・シアターの図書館に追加する書籍の調査を行った。図書資料の実際の購入は事業期間後半に行われる予定である。</p>
(3) 達成された効果	<p>本事業の期待される効果としては(イ) 教員-子ども・保護者、教員-地元市民社会の関係性の構築(ロ) 教員・ソーシャルワーカーの社会心理的ケアの方法の習得(ハ) ストレスケアの機会提供(ニ) 子どものストレスケアに対する継続的な関心を掲げている。</p> <p>(イ) 本事業では各月のワークショップに多様な参加者を迎えた。教員(幼稚園、小中学校)、学校に勤務するソーシャルワーカー、子供に関わる活動を行う地元NGOのスタッフなど、日常の業務で接することがまれな人々が出会う機会となった。3月、4月のワークショップ参加者を対象にした調査によると73%がワークショップ終了後も参加者間の交流を続けている。また、95%がワークショップ提供者である市民団体への信頼感を感じているという結果が出た。また当該団体の発行するニュースレターへの寄稿を参加者自ら申し出るといった積極的な関係構築も見られた。ワークショップで取得された手法を既に職場で実践した教員からは、「新たな手法を取り入れることにより、自分自身の考え方も変わり、子どもたちともより良い関係を気づくことが出来た」などの教員-子どもの関係性の改善が見られた。</p> <p>(ロ) ワークショップのトレーニングコンテンツについては、3月</p>

	<p>から5月の参加者の93%が満足していると回答。また、ドラマ・エデュケーションを教育に取り入れたい、といった声も多く寄せられた。他方、講師からは、参加者の職種に応じてアクティビティの心理面に与える効果についての理解度が異なるという指摘が寄せられ、理解度の向上に取り組むことが課題となっている。3月・4月のワークショップ参加者に対し実施された調査では、53%が既に日常の業務で子供たちと接する際に活用し、またその他の参加者も家庭や地域で実践をしていると述べた。その際、対象である子どもからポジティブな反応が返ってきていると回答している。</p> <p>(参加者からの評価の詳細に関しては、別紙1.2参照)。</p> <p>(ハ) 上記に示した通り、参加者が職場でメソッドを実践することによる、子どもたちへのストレスケアの機会提供が行われている。ワークショップの参加者自身が「アクティビティを通じて自信を持つことが出来た」「日常のストレスケアになった」「集中力を高めることができた」「コミュニケーション能力が向上した」という自己の変化を認識し、ドラマ・ワークを通じた心理ケアの効果を示している。また、6月2日に開催された実践フェーズでは21人の子どもが、参加者の実施するドラマ・ワークに参加した。</p> <p>(ニ) 3月4月のワークショップ終了後約2か月後に開催された実践フェーズには参加者の88%が出席し、本件についての継続的な関心の高さが確認できた。また、参加者のほぼ全員が同様のワークショップが開催された場合の参加希望を表明している。これらの継続性に寄与する図書資料の公開は事業後半に予定している。</p> <p>&lt;裨益者数&gt;</p> <p>ワークショップの対象者は、ヘブロン教育省を通じて各校、施設からの推薦者を募集した。その結果、100名以上の教員とソーシャルワーカー、さらに地元NGOから約70名の参加希望が寄せられ、現地での本事業への関心は非常に大きいと言える。</p> <p>(申請時見込みの裨益者数)</p> <p>ワークショップ参加者 60名  子ども向けワークショップ参加者約 100名  ワークショップ参加者の指導を受ける児童約 450名  ワークショップ参加者所属学校、施設職員約 300名  子ども向けワークショップ参加者の家族、地域住民約 300名</p>
(4) 今後の見通し	<p>当初月15回程度のワークショップを全6回実施する予定であったが、参加者の日常の職務との調整などから月9~10回程度のワークショップを3月から10月までの8か月間実施することとした。</p> <p>ワークショップ終了後に、参加者が子供たちに向けて学んだ手法を実践するイベントや、関係者のネットワークの継続状況に関する聞き取り調査は、各月のワークショップ終了時の2-4週間後に実施予定である。</p> <p>また、事業の柱の1つである情報の蓄積に関しては、専門家への聞き取り、情報収集などの調査を進め6月下旬より随時購入する。表</p>

現教育、ドラマ・エデュケーション、子どもの社会心理ケア、子どもの権利、児童保護などのトピックを中心とした書籍の購入を行う。参加者の反応や意見を分析、反映した事業実施の調整は今後も引き続き行う予定。留意事項として、参加者の性別に関して、各月の参加者から男女で行うワークショップに配慮がほしいという意見が出され、中にはワークショップ自体を分けてほしいという声もあった。しかし、パレスチナでは男女で学校が別れている場合が多く、日常の業務では連携する機会の限られている教員同士が繋がる機会は貴重であるという判断から、参加者への配慮をしつつ、今後も男女一緒に行うワークショップを継続する方針である。

来年以降の事業も見据え、多様な参加者に対応できるカリキュラムの拡充、運営方法の確立を図っていく。